悠久の京を訪ねて Part V Vol.4

KYOTO ARCHAEOLOGY CENTER

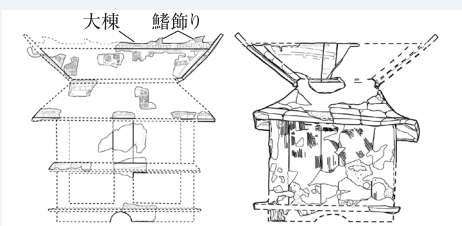
京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。
京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。
私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。
PartVでは、5回シリーズで8月16日から開催の第29回『小さな展覧会』より主な遺跡や遺物について紹介します。

御毛通２号墳の埴輪たち

■埴輪と葬送儀礼

八幡市の美濃山荒坂で、4世紀末～5世紀前葉に造られた古墳（御毛通2号墳）がみつかりました。墳丘はすっかり失われていましたが、古墳の周溝から2棟の家形埴輪と鶏形埴輪が出土しました。

埴輪は首長が亡くなり古墳に葬られる際に、古墳の上や周りに立てられたものです。聖なる空間を囲った円筒埴輪や朝顔形埴輪のほか、家、盾などの器物を造形した器財埴輪や巫女などの人物埴輪、馬などの動物埴輪があります。こうした埴輪を古墳の上に並べて、首長の墓を飾り立て、葬送儀礼を行ったと考えられています。家形埴輪は、屋根や壁の表現などから、人が住む住居、物を蓄える倉、政治を行う建物、祭りを行う祭殿などがあると考えられます。



御毛通2号墳出土の2種類の家形埴輪

■八幡市御毛通２号墳出土の埴輪

出土した家形埴輪は、いずれも高さは50cmほどです。1棟は、屋根の大棟に鰭飾りを付けた高床式建物（図左）です。もう1棟は、窓も飾りもない平床式建物（図右）です。高床式建物は装飾性豊かであることから祭殿、平床式建物は閉鎖的な建物であることから倉と想定されます。また、鶏形埴輪は頭部だけの出土ですが、目や耳・くちばしを写実的に表現しています。鶏は弥生時代に日本に伝来したと考えられており、時を告げる神聖な鳥とされてきました。

御毛通2号墳では、どのように埴輪が配置されていたのか不明です。しかし、祭殿や倉と考えられる家形埴輪が出土していることから、被葬者は地域の有力者であったと想像されます。

是非、展覧会に来て埴輪の細部にいたる見事な表現をご覧ください。

鶏形埴輪

家形埴輪の鰭飾り

※第29回『小さな展覧会』8月16日～9月7日（向日市文化資料館で開催予定／月曜・9月2日休み）

協力：公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　企画・制作：京都新聞COM